

— 1 —
次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(※) おおがき
大垣の女学校の生徒が修学旅行で箱根へ来て一泊した翌朝、出発の間ぎわに監督の先生が記念の写真を撮るといので、おおぜいの生徒が溪流に架したつり橋の上に並んだ。すると、つり橋がぐらぐら揺れだしたのに驚いて生徒が騒ぎ立てたので、振動がますますはげしくなり、そのためにつり橋の鋼索が断たれて、橋は生徒を載せたまま溪流に墜落し、無残にもおおぜいの死傷者を出したという記事が新聞に出た。

これに対する世評も区々で、監督の先生の不注意を責める人もあれば、そういう抵抗力の弱い橋を架けておいた土地の人を非難する人もあるようである。なるほどこういう事故が起こった以上は監督の先生にも土地の人にも全然責任がないとは言われないであらう。

しかし、考えてみると、この先生と同じことをして無事に写真をとって帰って、生徒やその父兄たちに喜ばれた先生は何人あるかわからないし、この橋よりもっと弱い橋を架けて、そうしてその橋の堪えうる最大荷重についてなんの揭示もせずに通行人の自由放任している町村をよく調べてみたら日本全国におよそどのくらいあるのか見当がつかない。それで今度のような事件はむしろあるいは落雷の災害などと比較されてもいいようなきわめて(a)稀有な偶然のなすわざで、たまたまこの気まぐれな偶然のいたずらの犠牲になった生徒たちの不幸はもちろんであるが、その責任を負わされる先生も土地の人にも誠に珍しい災難に会ったのだというふうには考えられないこともないわけである。

こういう災難に会った人を、第三者の立場から見ても事後にとがめ立てするほどやさしいことはないが、それならばとがめる人はたして自分でそういう種類の災難に会わないだけの用意が完全に周到にできているかという点、必ずしもそうではないのである。早い話が、平地震震の研究に関係している人間の目から見ると、(b)日本の国土全体が一つのつり橋の上にかかっているようなもので、しかも、そのつり橋の鋼索があすにも断たれるかもしれないというかなりな可能性を前に控えているような気がしないわけ

には行かない。来年にもあるいはあすにも、宝永四(一七〇七)年または安政元(一八五四)年のような大規模な広区域地震が突発すれば、箱根のつり橋の墜落とは少しばかり桁数のちがった損害を国民国家全体が背負わされなければならないわけである。

つり橋の場合と地震の場合とはもちろん話がちがう。つり橋はおおぜいでのつからなければ落ちないであろうし、また断えず補強工事を(c)怠らなければ安全であろうが、地震のほうは人間の注意不注意には無関係に、起こるものなら起こるであろう。

しかし、「地震の現象」と「地震による災害」とは区別して考えなければならぬ。現象のほうは人間の力でどうにもならなくても「災害」のほうは注意次第でどんなにでも軽減されうる可能性があるのである。そういう見地から見ると大地震が来たらつぶれるにきまつているような学校や工場の屋根の下におおぜいの人の子を集団させている当事者は言わば(2)前述の箱根つり橋墜落事件の責任者と親類どうしになって来るのである。ちよつと考えるとある地方で大地震が数年以内に起こるであろうという確率と、あるつり橋にたとえば五十人乗ったためにそれがその場で落ちるという確率とは桁違いのように思われるかもしれないが、必ずしもそう簡単には言われないのである。

(3)最近の例としては台湾の地震がある。台湾は昔から相当烈震の多い土地で二十世紀になってからでもすでに十回ほどは死傷者を出す程度のが起こっている。平均で言えば三年半に一回の割合である。それが五年も休止状態にあったのであるから、そろそろまた一つぐらいはかなりののが台湾じゅうのどこかに襲って来てもたいした不思議はないのであって、そのくらの予言ならば何人も学者を待たずともできたわけである。

しかし今度襲われる地方がどの地方でそれが何月何日ごろに当たるであろうということを的確に予知することは今の地震学では到底不可能であるので、そのおかげで台湾島民は烈震が来れば必ずつぶれて、つぶれれば圧死する確率のきわめて大きいような泥土の家に安住していたわけである。それでこの際そういう家屋の存在を認容していた総督府当事者の責任を問うて、とがめ立てることもできないことはないかもしれないが、当事者の側から言わせるとまたいろいろ無理のない事情があつて、この危険な土造りの民家を全廃することはそう容易ではないらしい。何よりも困難なことには、内地のような木造家屋は地震には比較的安全だが

台湾ではすぐに名物の白蟻（しゅうあり）に食べられてしまうので、その心配がなくて、しかも熱風防御に最適でその上に金のかからぬといういわゆる土角造りが、生活程度のきわめて低い土民「原住民」に重宝がられるのは自然の勢いである。

もともと阿里山（*9）の紅檜（べにひ）を使えば比較的あまりひどくは白蟻に食われないことが近ごろわかって来たが、あいにくこの事実がわかったころには同時にこの肝心の材料がおおかた伐り尽くされてなくなった事がわかったそうである。政府で歳入（*10）の帳尻を合わせるために無茶苦茶にこの材木の使用を（C）センデンし奨励して棺桶（かんおけ）などにまでこの良材を使わせたせいだといううわさもある。これはゴシップではあるがとにかく（X）あすの事はかまわぬがちの現代為政者のしそうなことと思われておかしさに涙がこぼれる。

それはとにかく、さし当たってそういう土民「原住民」に鉄筋コンクリートの家を建ててやるわけにも行かないとすれば、なんとかして現在の土角造りの長所を保存して、その短所を補うようなしかも費用のあまりかからぬ簡便な建築法を研究してやるのが急務ではないかと思われる。

それを研究するにはまず土角造りの家がいかなる順序でいかにこわれたかをくわしく調べなければならないであろう。もともと自分などが言うまでもなく当局者や各方面の専門学者によつてそうした研究がすでに着々合理的に行なわれていることであろうと思われるが、同じようなことは箱根のつり橋についても言われる。だれの責任であるとか、ないとかいうあとの祭りのとがめ立てを開き直つて（Y）子細らしくするよりもつとめだいたいじなことは、今後いかにしてそういう災難を少なくするかを慎重に攻究することであろうと思われる。それには問題のつり橋のどの鋼索のどのへんが第一に切れて、それから、どういう順序で他の部分が破壊したかという事故の物的経過を災害の現場について詳しく調べ、その結果を参考して次の設計の改善に（Z）資するのが何よりもいちばんたいせつなことではないかと思われるのである。

しかし多くの場合に、責任者に対するとがめ立て、それに対する責任者の一応の弁解、ないしは引責（*12）というだけでその問題が完全に落着いたような気がして、いちばんたいせつな物的調査による後難の軽減という眼目が忘れられるのが通例のようである。これではまるで責任というものの概念がどこかへ迷子になってしまふようである。

はなはだしい場合になると、なるべくいわゆる「責任者」を出さないように、つまりだれにも咎を負わせないように、実際の事故の原因をおしくしたり、あるいは見て見ぬふりをして、何かしらもつともらしい不可抗力（*13）によつたかのように付会してしまつて、そうしてその問題を打ち切りにしてしまふようなことが、つり橋事件などよりもつと重大な事件に関して行なわれた実例が諸方面にありはしないかという気がする。そうすればそのさし当りの問題はそれで形式的には収まりがつくが、それでは、全く同じような災難があとからあとから幾度でも繰り返して起こるのがあたりまえであろう。そういう弊の起こる原因はつまり責任の問い方が見当をちがえているためではないかと思う。人間に免れぬ過失（*14）自身を責める代わりに、④その過失を正当に償わないことをとがめるようであれば、こんな弊の起こる心配は**ないはず**であらうと思われるのである。

たとえばある工学者がある構造物を設計したのがその設計に若干の欠陥（*15）があつてそれが倒壊し、そのために人がおおぜい死傷したとする。そうした場合に、その設計者が引責辞職してしまふかなしい切腹して死んでしまえば、それで責めをふさいだというのはどうもうそではないかと思われる。その設計の詳細をいちばんよく知っているはずの設計者自身が主任になつて倒壊の原因と経過とを徹底的に調べ上げて、そうしてその失敗を踏み台にして徹底的に安全なものを造り上げるのが、むしろほんとうに責めを負うゆえんではないかという気がするのである。

（寺田寅彦『天災と国防』による）

《注》

- * 1 大垣……岐阜県大垣市。
- * 2 鋼索……鋼製の針金をより合わせて作ったワイヤーロープ。
- * 3 平生……ふだん。いつも。
- * 4 烈震……地震の強さの旧階級。現在の震度6にあたる。

- *5 泥土……水がまじってどろどろになった土。
- *6 総督府……その国を支配している国が設置する、政治を行う役所。当時、日本は台湾に総督府を設置していた。
- *7 土角造り……泥土を固めて作った、台湾の伝統的な家屋。地震に弱いとされる。
- *8 内地……台湾など日本が占領した土地（外地）に対して、日本の本来の領土のことをいう。
- *9 阿里山の紅檜……台湾の阿里山郷という地域に多く生息する樹木。タイワンベニヒノキ。
- *10 歳入……国家の収入。
- *11 当局者……ここでは、行政の関係者のこと。
- *12 咎……罪。
- *13 付会……こじつけること。

問一 部(a) (c)のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 本文の筆者、寺田寅彦について説明した次の文章中の A B C E に入る語の組み合わせとして正しいものを選びなさい。

寺田寅彦は、文学者でもあり科学者でもあった。寺田寅彦が、熊本第五高等学校に在学中に出会い、のちにその弟子となつた文学者 A の作品『 B 』には、寺田寅彦がモデルと言われる水島寒月が登場し、苦沙弥先生に科学理論の話をする場面もある。寺田寅彦は、正岡子規の友人である柳原極堂が創刊した C の雑誌『ホトトギス』にも寄稿していた。『ホトトギス』には、 A が愛媛県松山の中学校での教員経験を元にしたとされている『 D 』

も連載された。寺田寅彦の作風は、雑誌の傾向、師匠の影響もあり、 E によるものが多かった。

ア A 夏目漱石	B 吾輩は猫である	C 詩	D ころ	E 写生文
イ A 芥川龍之介	B トロッコ	C 俳句	D 蜘蛛の糸	E 古文体
ウ A 夏目漱石	B 坊っちゃん	C 漢文	D 吾輩は猫である	E 写生文
エ A 志賀直哉	B 暗夜行路	C 詩	D 和解	E 戯作調
オ A 芥川龍之介	B 蜘蛛の糸	C 俳句	D トロッコ	E 古文体
カ A 夏目漱石	B 吾輩は猫である	C 俳句	D 坊っちゃん	E 写生文
キ A 芥川龍之介	B 蜘蛛の糸	C 漢文	D 杜子春	E 戯作調
ク A 夏目漱石	B ころ	C 詩	D 坊っちゃん	E 古文体
ケ A 芥川龍之介	B トロッコ	C 詩	D 杜子春	E 戯作調
コ A 志賀直哉	B 和解	C 俳句	D 暗夜行路	E 古文体

問三 — 部 (X) (Z) の意味として最も適当なものを選びなさい。

(X)

- ア 先のことまで考えないほうがよい イ 明日のことすら知らないような ウ 明日のことを心配する者が多い
エ 目先のことしか考えない傾向にある オ 後先考えず突き進んでしまう

(Y)

- ア 徹底的に イ 意味ありげに ウ 堂々と エ 誠実に オ 黙々と

(Z)

- ア 投資する イ 資金にする ウ 資格がある エ 取り組む オ 役立てる

問四 — 部①「日本の国土全体が一つのつり橋の上にかかっているようなもので、しかも、そのつり橋の鋼索がアすにも断たれるかもしれない」とあるが、どういうことか説明しなさい。

問五 — 部②「前述の箱根つり橋墜落事件の責任者と親類どうしになって来る」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 箱根つり橋事件の責任者が、つり橋の墜落を防げなかったのと同様に、地震を予見することができていないから。

イ 箱根つり橋事件の責任者が、つり橋の弱さに気づけなかったのと同様に、建物の弱さに気づくことができていないから。
ウ 箱根つり橋事件の責任者が、万が一を考えなかったのと同様に、地震による災害を軽減するように気をつけていないから。
エ 箱根つり橋事件の責任者には偶然の事故とはいえ責任があるのと同様に、偶然起きる地震にも責任者には責任があるから。
オ あるつり橋が落ちる確率と、ある地方で大地震が数年以内に起こるであろう確率とは、同じくらいのものであるから。

問六 — 部③「最近の例としては台湾の地震がある」とあるが、筆者がこの例によって主張していることの説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 地震による災害を軽減するように、台湾の建築について調べ、改善するのが重要であるということ。
イ 地震の多い地域に、壊れやすい家屋を建てることを容認した為政者の責任を問うべきであるということ。
ウ 様々な事情から、泥土の家を全廃することは難しいので、木材を使った建築にするべきであるということ。
エ 土角造りの長所を保存し、その短所を補うような建築法を研究してやるべきであるということ。
オ つり橋の事件と同様に、責任者を明確にして、その責任を追及するべきであるということ。

問七 — 部④「その過失を正当に償わないことをとがめるようであれば、こんな弊の起こる心配はないはずであろう」とあるが、なぜそういえるのか説明しなさい。

次の文章は若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』の一節である。「桃子さん」は、夫と死別し一人暮らしをしている七十四歳の女性である、最近急に娘の「直美」から電話が来るようになり、桃子さんはその電話を楽しみにする毎日を過ごしている。これを読んで、後の問いに答えなさい。

済まなかった。直美、おらは女の子であるおめはんへの接し方が分がらなかった。

母ちゃんは、母は勝気な人だった。いつも命令口調で自分の思い通りにならねば気の済まない人だった。桃子さんの強い味方であつたばつちはすでに亡く、桃子さんはいつも母親の顔色を窺^{うかが}つてばかりいた。娘のころ、髪に刺したピン留めを色気づく^{いろけづく}と怒鳴られて引きちぎられたことがある。母は桃子さんが年相応に女らしくなるのを異常に恐れた。

何かが損^{そと}なわれると思っているかのようだった。これは後々まで崇^たつて、桃子さんは今でも自然な動作というのが苦手だ。自分の女の部分にどう向き合えばいいのか分からない。

素直に、というのが桃子さんにしてみれば一番困つたのだった。晴れの舞台に緊張して右手右足を同時に出して歩く小学生がいるけれど、桃子さんばかりはそれを笑えない。

直美にはそんな思いはさせない。といってどうしてやればいいのか分からなかった。

結局、自分のあこがれを娘に映すことしかできなかった。

フリルのいつぱい付いたスカートは、小さいころの桃子さんの夢だったのだ。

何のことはない、桃子さんが母に^①過剰にせき止められていたことを、過剰に与えようとしただけだったのかもしれない。期せずして桃子さんも娘を自分好みに思い通りに操^{あやつ}ろうとしたのだ。

同じ。母から娘へ。娘からまたその娘へ。

なんだってこうも似るもんだべ。伝染病のように。なぜ。そのことが桃子さんの関心のすべてだった時もある。調べだじえい。

考えもしたんだ。ずいぶん心のうちを探索もしたのだ。桃子さんの心のうごめく有象無象、声を絞^{しぼ}り出して語り始める。

分がつたときのごどをおぼえでつか。おらはあの日のごどは忘れらんね。

目に見えない仕組みがあるのだと分かった。おらはそれにまんまと乗つかってしまった。

何にも知らながつた。無知は罪だ。おめだ、おらの悔しさが分がつか。鼻水と涙でぐしょぐしょになりながらおらはこの部屋で、

^②革命だ、革命だと言って走り回つた。

あの日のことは忘れられない、ああ、たしかに。したがそれをどうやって直美に伝える。

桃子さんは戸惑う。

「母さん、あの」

電話の向こうで今度は直美が言いよんでいる。

「……急で悪いんだけど、あの……お金貸してくれない」

X

つ返事でうんと言えはよかったのに咄嗟^{とつさ}のことで躊躇^{ちゅうちゆ}した。

直美は胸^{つか}に悶^もえていたものを口に出したからなのか、あとは一息に喋^{しゃべ}り出した。

「隆^{たかし}、絵の才能あると思うの。だから、都心の評判のいい絵画教室に通わせて本格的に習わせたいの。入学金とか^(a)ゲツシヤ、私のパート代だけじゃ足りないの。ねえ、母さん貸してくれない」

「……………」

すぐには答えられなかった。だが決してお金が惜^おしかったわけではない。なぜだかさやか^(*)の顔が浮かんだ。

「母さん、お願い」

「……………」

電話の向こうの直美の息遣^{づか}いが聞こえる。

沈黙がだんだん直美の感情を害していくようだった。受話器を持つ手が震えた。

「なによ。お兄ちゃんだったら、すぐに貸してあげる癖に」

嫌な予感がした。話は桃子さんの一番触れてほしくない方向に進んでいく。^③ 滝つぼに流れ落ちる急流のようだ、もうぐつぐつと

うもない。唇を咬んだ。

「だから、おれおれ詐欺になんか引つかかるのよ」

「母さんはわたしのことなんか……」

耳元で大きな音で電話が途切れた。

耳に受話器を当てたまま桃子さんは呆然と立ち尽くした。

直美が、また遠ざかる。頭の中を白々とした感情が流れて行く。

悲しみというのとも違う、そんなのはもう慣れっこだった。ただ、^④ ああ、そうだったのか、という感情である。それが頭の中で動き始めて、あとはただこれまでに桃子さんの上に起こったことが静かに思い起こされた。

おれおれ詐欺。そうなのだった。

直美と二つ違いの息子正司は大学を中退してしばらく音信不通だったことがある。かあさん、もうおれにのしかからないで、家を出るときに言った最後の言葉が忘れられない。

今は他県に就職し連絡もくれるようになったが、家にはめったに帰らない。帰っても子供のころのようには桃子さんに心を開かない。もう十年以上前になるか、その正司を名乗る電話が掛かってきて、会社の金を使い込んでしまったと言った。見つかる前に何とか補填してもらえないだろうか。その声の切迫した調子に桃子さんは慌てて正司の同僚と名乗る男に二百五十万もの大金を渡してしまった。不覚であった。

それにしても、どうしてこうも似るのだろう。

「母さんはお兄ちゃんばかりをかわいがる」それが直美の本当の不満だった。そして桃子さんも。受話器を持つ手が固まったまま桃子さんの目線はさらに遠いほうを見る。

高校を卒業してしばらくは家にいた。ずっと郷里にいるつもりだった。母の念願通り農協に勤めることになって、働き始めて四年たったころだったと思う。仕事にも慣れて桃子さんは結構評判のいい働き手だった。農協の購買部に来るお客に、その頃は量り売りだったから塩でも砂糖でも必ず多めに入れてあげた。それが喜ばれて桃子さんを目当てに買い物をする人がでくるほどだった。それが母の耳にも入ったらしい。蚊取り線香の煙るころだったから夏の夜だったのだろう。あのととき母ちゃんはしみじみと桃子さんに告げたのだった。結婚なんてつまらね。ずっとこの家について働いたほうがいい。それだばおめはんも楽しいし、この家のためにもなる。母ちゃんはひとことひとこと噛みしめながら自分も納得し桃子さんにも言いつて聞かせるといふうにゆつくりと話した。この家つて、兄さんが継ぐ兄さんの家のためにということか。桃子さんは黙って聞いていたがやはり激しいものが渦巻いた。その年の秋、組合長さんの息子との縁談が持ち上がり、好きでも嫌いでもなかったけれど桃子さんは受け入れた。とんとん拍子に話が進み、結納も済み、あと三日でご祝儀という日にあれが鳴ったのだ。ファンファーレ、東京オリンピックのファンファーレ。あの高鳴る音に押し出されるように、式場も段取りも何もかも整っていたのに故郷の町を飛び出してしまった。何にも考えていなかった。ただあの音が桃子さんに夢を見させた。

ずっとあそこにいるのはもう嫌だ。母ちゃんの目の届かないところで何もかも新しく始めたい。どこかきらびやかなのがここでないどこかにあるはずだもの。夜汽車に揺られながら何度も何度も自分に言い聞かせた。

桃子さんはロマンチックな憧れだけで何の計画もなかった若い日の夢想を笑う。あきれてしまう。

人の感情には思いもよらないすさまじいエネルギーがあるのだと桃子さんは思う。そのエネルギーに弾き飛ばされる^(b) 独楽のようにして、人の人生は回転します。転がったその先が良かったのかどうか、そんなことは考えまい、ただそうあることを受け止めるしかないのだろう。ただし桃子さんを動かしたエネルギーの正体ははっきりと見極めたい。そのエネルギーがどう変わったか

も見届ける。なにせ当事者だもの。

しびれる腕をさすりながらやと受話器を置いたとき、桃子さんの目には力があつた。負け惜しみかもしれない。直美が行つてしまふ、がつくりとうなだれそうになる自分を励ますもう一方の自分もいて、それがさかんに、たいていのことは思い通りにならなかつたじゃないか、それでも何とかやつて来られたじゃないか、だから今度だつてなんとかなるさというような、桃子さんがこれまで培つたところの生きるための樂觀をあれこれと言ってくる。

桃子さんはため息を吐きつつも前を見た。そのまま、^(c)レイゾウコに直行して、ドアを開け、缶ビールを取り出すと立たまま飲み始めた。ひとしきり飲んであたりを見回すと、もうずいぶん暗くなっている。缶を手を持ったままよたと部屋の隅によつて蛍光灯を点け、振り返ると出窓のところに女が一人立っていた。白髪交じりの蓬髪の女、すぐに山姥だと思つた。どうしてうちにいるのだらうと訝しく、しばらくして桃子さんは、あはあはと笑つてどたと椅子に座つた。

降り続く雨をいいことに、ろくに髪もとかさず、身なり構わず、ザンバラの白髪交じりの女は出窓に映つた自分の姿だと気が付いた。静かな部屋に桃子さんの笑い声が響いて、それから歌うように笑うように陽気に独りごつ。

山姥がいるじよ。ここにいる。現代の山姥は人里離れた山奥なんかにはいない。こうしてかつての新興住宅地にひっそりと住んでいる。山姥は太母ののちの姿である。太母とは何か。子供を大事に育てた母親のことである。大事に育てたのに、子供の命を呑み込んでしまつたのではと恐れる母親のことである。飲んだビールのせいなのか、なぜだか桃子さんは演説口調である。

またぐいと飲んだ。

直美、聞いているが。

直美は母さんが見も知らない男に金を渡してしまつたのは、正司への偏頗な愛情のせいだと思つてゐる。だども、それは違う。違ふのだ、直美。

それが贖罪だと言つたら、おめはんは驚くだろうか。

直美、母さんは正司の生きる喜びを横合いから手を伸ばして奪つたような気がして仕方がない。母さんだけでない。大勢の母親が Y と金を差し出すのは、息子の生に密着したあまり、息子の生の空虚を自分の責任と嘆くからだ。それほど、母親として生きた。

母親としてしか生きられなかつた。

直美、母親は何度も何度も自分に言い聞かせるべきなんだと思う。

自分より大事な子供などいない。自分より大事な子供などいない。

自分がやりたいことは自分がやる。簡単な理屈だ。子供に仮託してはいけない。仮託して、期待という名で縛つてはいけない。

二缶め、また飲んだ。^⑤ 飲むたびになぜだか愉快な気分になつてゐる。

山姥か。山姥だ。

もう誰からも奪うことがない、奪われることもない。風に吹かれて、行きたいところに行く。休みたいところに休む。もう自由だ、自由なんだ。

だいたい、いつからいつまで親なんだか、子なんだか。親子といえば手を繋ぐ親子を想像するけれど、ほんととは子が成人してからのほうがずっと長い。かつての親は末っ子が成人するころには亡くなつてしまつたそうだけど、今の親は自分の老いどころか子の老いまで見届ける。そんなに長いんだつたら、いつまでも親だの子だのにこだわらない。ある一時期を共に過ごして、やがて右と左に分かれていく。それでいいんだと思う。

それでもちゃんと覚えているのだ、大事だということを。

とろんとした目で桃子さんはうなずく。

目に映じてゐるのは母ちゃんの姿である。

帰るに帰れなかつた故郷、許されて帰つたのは父の葬儀のどぎだつた。結局兄も都会に出て所帯を持って、広い家に母ちゃんひ

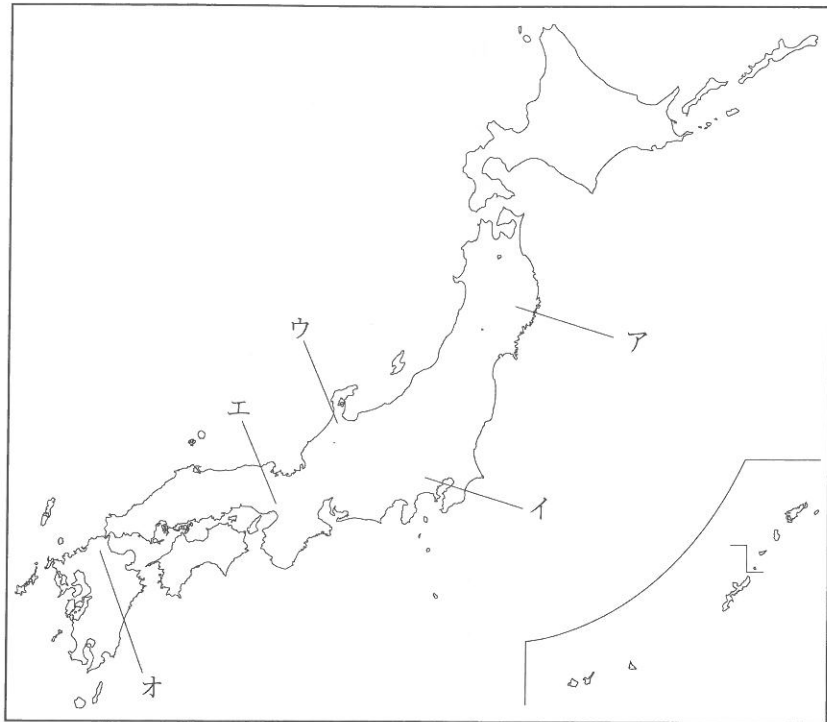
とりが取り残された。ひと回りもふた回りも小さくなって、もう何の役にも立たないと嘆いていたが、なんの、桃子さんにしてみればあの頃の母に一番力づけられる。あの後あの家で独り二十三年生きた。母にできたことは自分もできると思いたい。でも母ちゃんにはやっぱりかなわない。空に献^{けん}じてまた飲んだ。

《注》

- *1 さやか……直美の娘。
- *2 補填……不足をおぎないうめること。
- *3 蓬髪……生い茂った蓬^{よもぎ}のように、伸びてくしゃくしゃに乱れた髪。
- *4 偏頗……かたよっていて不公平なこと。
- *5 贖罪……つみほろぼし。

問一 〓部(a) 〓(c)のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。なお、(b)はひらがな二字で書くこと。

問二 この作品のタイトル「おらおらでひとりいぐも」は、宮沢賢治の詩「永訣の朝」に記された、ある地方の方言によるものである。その地方を指したものを次の地図上にある記号の中から選びなさい。



問三 空欄 に入る漢字一字を書きなさい。

問四 空欄 には「不注意であるさま」を表す言葉が入る。最も適当なものを選びなさい。

ア むざむざ イ すくすく ウ いそいそ エ しおしお オ わなわな

問五 — 部①「過剰にせき止められていたことを、過剰に与えようとした」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 厳しいしつけをしなければ社会で通用しない子になってしまうと、母親は事あるごとに桃子さんを叱りつけてきたが、そのことがあまりにつらかったことで、桃子さんはかえって娘を甘やかすような母親になってしまったのだということ。
イ 物を与えれば、人間として持つべき節約の精神が損なわれてしまうと、異常なまでに物を与えてくれなかった母親への恨みから、かえって桃子さんは、娘に異常なまでに物を買って与えてしまい、娘にぜいたくを覚えさせてしまったということ。
ウ 女の子らしくふるまうことを母親に全く許されなかったことで、自然な動作をすることが苦手になってしまった桃子さんは、娘には自然に生きてもらいたいと思うようになり、あまりに自由奔放な生き方を娘に強制してしまっていたということ。
エ 普通の女の子であれば誰もがするようなおしゃれでさえ母親に認められなかったことで、桃子さんの心はすっかりひねくれてしまい、自分の最愛の娘にも、自分の幼少期と同じようなつらい思いをさせようとしてしまったということ。
オ 女性として自然な欲求さえも母のせいで満たせなかった反動で、桃子さんは、幼いころの自分の願いを娘に叶えさせることで積年の自らの欲求を満たそうとし、娘の気持ちを一切無視した独りよがりな接し方をし続けてきたということ。

問六 — 部②「革命だ、革命だ」とあるが、何が「革命」だというのか。このことを説明した次の一文の空欄に入るように、指定の字数に合わせて本文中から抜き出しなさい。

母親が娘を とすることは、次世代にも繰り返されるといふ に気づいたこと。

問七 ――部③「滝つぼに流れ落ちる急流のように、もうどうしようもない」とあるが、これは桃子さんのどのような心情とひびき合う表現だと考えられるか。最も適当なものを選びなさい。

ア 桃子さんは、息子の正司よりも、女性特有の苦しみが共有でき、今では電話をくれることで精神的な支えになってくれている直美のほうを大切に思っているのに、桃子さんが作ってしまった沈黙によって、直美が桃子さんの思いを誤解し、不信感を抱いてしまったことに、取り返しのつかないことをしたと、悔いる気持ちにさいなまれている。

イ 母親として子どもに関わるべきか、その手本を娘に示す立場にありながら、簡単にだまされ、見知らぬ男に大金を渡してしまったことは、桃子さんにとって最大の失策であり、消し去りたい過去であるのだが、直美がこの件を忘れていないことに気づき、母親としての威厳を取り戻していない現状に、この上なく落胆している。

ウ 直美が桃子さんの沈黙を金を惜しんだからだと解釈した以上、桃子さんがかつて正司を名乗る男に即座に大金を渡した過去が引き合いに出されることは間違いないが、その話題は、桃子さんの子育てにおいての強い後悔の念を呼び起こすものであり、情けない過去に今また向き合わざるを得ない展開に絶望的な気持ちを抱いている。

エ 見知らぬ男に大金を渡してしまったことの責任は、桃子さん一人にあるわけではないのに、直美が事あるごとにその責任を追及し、桃子さんにお金を要求してくることで、ここ数年は直美からの電話に孤独をいやされ救われたような気持ちになっただけに、かえって強い失望の念を覚え、この場から逃れたいような気持ちになっている。

オ 桃子さんの沈黙は、お金を惜しんだからではなく、隆を正司のような人間にしたいくない一心からのものだったのに、そのことにすら気づけない直美に、直美と過ごしてきた日々が不毛なものであったと改めて感じ、老後の自身の孤独な日々を、自分でまいた種であり、仕方のないことだと自分に言い聞かせ、全てをあきらめようとしている。

問八 ――部④「ああ、そうだったのか」とあるが、桃子さんは何に気づいたのか。五十字以上六十字以内で書きなさい。

問九 ――部⑤「飲むたびになぜだか愉快的気分になっている」とあるが、それはなぜだと考えられるか。七十字以上八十字以内で説明しなさい。

